

2025年度

ウメ防除暦



間伐・剪定を徹底し薬剤のかかりやすい園地にしましょう

農薬残留リスク低減のため農薬散布に伴う飛散には十分に注意しましょう

基準防除（柿隣接園対応）（それ以外の隣接園では、各関係機関に問い合わせてください。） ※ 薬品名の後ろの（ ）はRACコードです。

時期	病害虫	薬剤及び濃度	R A C	収穫前使用時期	使用回数	備考
冬期	越冬病害虫	石灰硫黄合剤 7～10倍	M2	発芽前	――	○防除効果を高めるため、間伐・整枝・剪定を徹底する。 ○タマカタカイガラムシ多発園では剪定時に残らずかき落とす。 ○スプレーオイル(-)とは1か月以上あけること。（薬害）。 ○開花期に近づくとも濃度を低くする。 ◎クビアカツアカミキリの食入孔(フラス)を発見したら、ロビンフッド(3A) (エアゾール)で駆除する。 ※指定機関への連絡を怠らない事。
開花期	ミツバチを放つので開花中は殺虫剤を散布しない。					
落弁期	灰色かび病	ストロビードライフロアブル 2,000倍	11	収穫7日前まで	3回以内	○ミツバチの巣箱を引き上げた後、速やかに防除する。
展葉初期 (4月上旬まで)	黒星病	ナティーボフロアブル 2,000倍 または オーソサイド水和剤80 800～1,000倍	3+11 M4	収穫前日まで 収穫21日前まで	3回以内	○オーソサイド水和剤80(M4)は、小梅に薬害の恐れがあるので小梅混植園では使用しない。 ○アブラムシ類発生園では、散布7～10日後にスミチオン乳剤(1B) 1,000～2,000倍 (収穫14日前まで・2回以内) で追加防除をおこなう。
	アブラムシ類	アルバリン顆粒水溶剤 2,000倍	4A	収穫前日まで	3回以内	
4月上旬中 (果実が小豆大になるまで)	黒星病	デランフロアブル 2,000倍 または ベルコート水和剤 2,000倍	M9 M7	収穫14日前まで 収穫30日前まで	2回以内 3回以内	○降雨量が多い場合は、4月下旬にアミスター10フロアブル(11) 1,500倍 (収穫前日まで・3回以内) を散布
	コスカシバ	フェニックスフロアブル 4,000倍	28	収穫前日まで	2回以内	○成虫発生初期から終期（樹幹部・主枝にムラなく散布する）
5月上旬中	黒星病 すす斑病	ベンレート水和剤 3,000倍	1	収穫7日前まで	1回	○小梅・鶯宿の混植園では収穫期に近いため、カイガラムシ類にはモスピラン顆粒水溶剤(4A) 2,000倍 (収穫前日まで・3回以内) を用いる。
	カイガラムシ類 アブラムシ類 ハダニ類	モベントフロアブル 2,000倍	23	収穫7日前まで	3回以内	○隣接園が富有の場合、ミツバチへの影響が懸念されるため、モスピラン顆粒水溶剤(4A) 2,000倍 (収穫前日まで・3回以内) を用いる。
5月下旬	黒星病 すす斑病	スコア顆粒水和剤 3,000倍	3	収穫前日まで	3回以内	○スコア顆粒水和剤(3)の代用でオンリーワンフロアブル(3) 2,000～3,000倍 (収穫前日まで・3回以内) でも可。
南高 6月下旬	すす斑病	インダーフロアブル 5,000倍	3	収穫前日まで	2回以内	○ストロビードライフロアブル(11)、フリントフロアブル25(11)とアミスター10フロアブル (11)(ストロピリン系)、およびスコア顆粒水和剤(3)とインダーフロアブル(3)(EBI剤)、オンリーワンフロアブル(3)は同一系統なので、連用にならないように注意する。
		アミスター10フロアブル 1,500倍	11	収穫前日まで	3回以内	

（注）表中の使用回数は、その薬剤の使用回数を記載しています。このほかにも、農業には有効成分ごとに総使用回数が定められています。そのため、薬剤名が異なっても有効成分がものや、適合剤などの使用に際しては、ラベルなどに記載されている有効成分ごとの総使用回数に基づき使用して下さい。

他作物が隣接しない、飛散の心配のない梅園の場合

時期	病害虫	薬剤及び濃度	R A C	収穫前使用時期	使用回数	備考
冬期	越冬病害虫	石灰硫黄合剤 7～10倍	M2	発芽前	――	○防除効果を高めるため、間伐・整枝・剪定を徹底する。 ○タマカタカイガラムシ多発園では剪定時に残らずかき落とす。 ○スプレーオイル(-)とは1か月以上あけること。（薬害）。 ○開花期に近づくとも濃度を低くする。 ◎クビアカツアカミキリの食入孔(フラス)を発見したら、ロビンフッド(3A) (エアゾール)で駆除する。 ※指定機関への連絡を怠らない事。
開花期	ミツバチを放つので開花中は殺虫剤を散布しない。					
落弁期	灰色かび病	ロブラール水和剤 1,000～1,500倍	2	収穫45日前まで	2回以内	○ミツバチの巣箱を引き上げた後、速やかに防除する。
展葉初期 (4月上旬まで)	黒星病	ナティーボフロアブル 2,000倍 または オーソサイド水和剤80 800～1,000倍	3+11 M4	収穫前日まで 収穫21日前まで	3回以内	○オーソサイド水和剤80(M4)は、小梅に薬害の恐れがあるので小梅混植園では使用しない。 ○アブラムシ類発生園では、散布7～10日後にスミチオン乳剤(1B) 1,000～2,000倍 (収穫14日前まで・2回以内) で追加防除をおこなう。
	アブラムシ類	アルバリン顆粒水溶剤 2,000倍	4A	収穫前日まで	3回以内	
4月上旬中 (果実が小豆大になるまで)	黒星病	デランフロアブル 2,000倍 または ベルコート水和剤 2,000倍	M9 M7	収穫14日前まで 収穫30日前まで	2回以内 3回以内	○降雨量が多い場合は、4月下旬に アミスター10フロアブル(11) 1500倍 (収穫前日まで・3回以内) を散布する。
	コスカシバ	フェニックスフロアブル 4000倍	28	収穫前日まで	3回以内	○成虫発生初期から終期（樹幹部・主枝にムラなく散布する）
5月上旬中	黒星病 すす斑病	ベンレート水和剤 3,000倍	1	収穫7日前まで	2回以内	○小梅・鶯宿の混植園では収穫期に近いため、カイガラムシ類にはモスピラン顆粒水溶剤(4A) 2,000倍 (収穫前日まで・3回以内) を用いる。
	カイガラムシ類 アブラムシ類 ハダニ類	モベントフロアブル 2,000倍	23	収穫7日前まで	3回以内	
5月下旬	黒星病 すす斑病	スコア顆粒水和剤 3,000倍	3	収穫前日まで	3回以内	○スコア顆粒水和剤(3)の代用でオンリーワンフロアブル(3) 2,000倍～3,000倍 (収穫前日まで・3回以内) でも可。
南高 6月下旬	すす斑病	インダーフロアブル 5,000倍	3	収穫前日まで	2回以内	○ストロビードライフロアブル(11)、フリントフロアブル25(11)とアミスター10フロアブル (11) (ストロピリン系)、およびスコア顆粒水和剤(3)とインダーフロアブル(3)(EBI剤)、オンリーワンフロアブル(3)は同一系統なので、連用にならないように注意する。
		アミスター10フロアブル 1,500倍	11	収穫前日まで	3回以内	

病害虫の発生状況により必要な防除

病害虫	判断基準	防除時期および防除法
かいよう病	前年発生園	葉芽発芽前：ICボルドー66D(M1) 50倍またはムッシュボルドーDF(M1) 500倍 (いずれも葉芽発芽前まで)。 ただし、ムッシュボルドーDF(M1)は柿隣接園では使用しない。
		3月下旬～4月下旬：マイコシールド(41) 1,500倍 (収穫21日前まで・4回以内) を約10日おきに3回程度散布する。 風当たりの強い園では防風対策 (防風垣・ネット) を実施する。
アブラムシ類	葉巻が目立つ場合	モベントフロアブル(23) 2,000倍 (収穫7日前まで・3回以内) を散布する。
カイガラムシ類 (幼虫)	多発の場合	収穫直後 (7月上旬) および8月下旬～9月上旬：コルト顆粒水和剤(9B) 2,000倍 (収穫前日まで・3回以内) 、またはアプロード水和剤(16) 1,000倍 (収穫後～落葉前・2回以内) を散布する。アプロード水和剤(16)は柿に薬害 (開花期以降) があるので、柿隣接園では使用しない。 12月中旬：スプレーオイル(-) 30～50倍 (12月) を散布する。厳寒期を避け、降雨が心配される時は散布しない。
コスカシバ	多発の場合	スカシバコンL(-) 40～100本/10a ○スカシバコンL(-)は成虫の羽化開始前 (4月下旬まで) に樹幹に近い目通りの位置の枝に取り付ける。 地域ぐるみで設置すること。
灰星病	多発の場合	前年度発生園 フルーツセイバー(7) 1,500倍 (収穫前日まで・3回以内) を使用する。
ケムシ類		オリオン水和剤40(1A) 1,000倍 (収穫7日前まで・3回以内) を使用する。

（注）マイコシールド(41)は、柿隣接園では食品衛生法に基づく農薬残留基準の関係で、柿(果実)からこれらの農薬成分が検出されれば出荷停止、栽培自粛など、産地として大きな打撃を受けることになります。よろしくご理解をお願いします。

※この防除暦は2024年度時点での登録内容です。国の農薬登録制度が変わったため、登録内容が変更になる場合があります。
農薬使用時には最新の登録内容を必ずご確認ください。※



お問い合わせは

有限会社

ふじまん

藤万

五條市野原西4丁目11－30
TEL：0747-23-2400
FAX：0747-22-2035
MAIL：inquiry@fujiman.co.jp
H P：https://fujiman.co.jp/



藤万公式サイト

2025年度

モモ防除暦



病枝の選除や防風対策をすすめましょう。

農薬残留リスク低減のため農薬散布に伴う飛散には十分に注意しましょう。

基準防除

※薬品名の後ろの()はR A Cコードです。

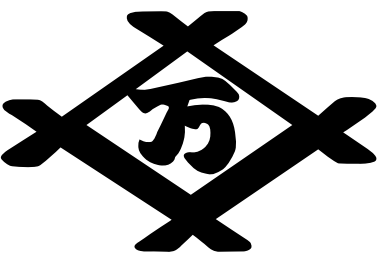
時期	病害虫	薬剤及び濃度	R A C	収穫前使用時期	使用回数	備考
休眠期	越冬害虫	冬期管理 ○カイガラムシ類・ハダニ類には、スプレーオイル(－) 25～50倍を散布する。ただし、樹勢の弱い樹への散布は控える。 ○2月頃、バンドをはずして焼却する。 ○幼木では、極冬期の剪定を避け3月に剪定する。(立枯れ病：幼木で新梢の生育が悪く最終、枯死に至る) ○剪定枝の切り口にはトップジンMペースト原液(1)(3回以内)などの保護剤を塗布する。 ○クビアカツヤカミキリの食入孔(フラス)を発見したらロビンフード(3A)(エアゾール)で駆除する。※指定機関への連絡を怠らない事。				
3月中旬 (発芽前)	黒星病 縮葉病	石灰硫黄合剤 7倍 または チオノックフロアブル 500倍	M2 M3	発芽前 収穫7日前まで	―― 5回以内	○チオノックフロアブル(M3)は、せん孔細菌病にも効果がある。 ○コスカシバの被害部の幼虫は、剪定バサミなどで捕殺できる。 ○フェニックスフロアブル(28)は樹幹部および主枝に散布する。
	コスカシバ	フェニックスフロアブル 200～500倍	28	開花期まで	1回以内	
3月下旬 (開花直前)	せん孔細菌病 縮葉病	ICボルドー412 30倍	M1	――	――	○集団産地では地域ぐるみでフェロモン剤のコンフューザーMM(－)(4月中旬～)を設置(120本/10a)すると、シンクイムシ類、ハマキムシ類およびモモハモクリガに対して防除効果がある。同様にスカシバコンL(－)(4月中旬～)を設置(50本/10a)すると、コスカシバに対して、防除効果がある。
4月中旬 ～下旬	せん孔細菌病 黒星病 灰星病	デランフロアブル 600倍	M9	収穫7日前まで	4回以内	
	ウメシロカイガラムシ シンクイムシ類	オリオン水和剤40 1,000倍	1A	収穫14日前まで	2回以内	
4月下旬 ～5月上旬	せん孔細菌病	マイコシールド 1,500～3,000倍	41	収穫21日前まで	5回以内	○シンクイムシ類による芯折れ状態の新梢は、早目に剪除する。 ○アブラムシ類多発園では、モスピラン顆粒水溶剤(4A) 2,000～4,000倍(収穫前日まで・3回以内)を散布する。
5月上旬 ～中旬 (袋かけ前)	黒星病	セルカディスDフロアブル 1,500倍	M9+7	収穫7日前まで	3回以内	○ナリアWDG(11+7)は果実赤点病、すすかび病、ホモブシス腐敗病にも登録がある。 ○ダイアジノン水和剤34(1B)は、クワコナカイガラムシ若齢幼虫に登録がある。 ○サイアノックス水和剤(1B)は、カイガラムシ類に登録がある。 ○殺虫剤はアルバリン顆粒水和剤(4A)2,000倍(収穫前日まで・3回以内)とサムコルフロアブルi0(28) 5,000倍(収穫前日まで・3回以内)の混用でも可。
	灰星病	または ナリアWDG 2,000倍	11+7	収穫前日まで	2回以内	
	せん孔細菌病	バリダシン液剤5 500倍	U18	収穫7日前まで	4回以内	
	アブラムシ類 カイガラムシ類 ハダニ類	モベントフロアブル 2,000倍	23	収穫7日前まで	3回以内	
6月上旬	黒星病 灰星病 ホモブシス腐敗病	ダコレート水和剤 1,000倍	1 + M5	収穫3日前まで	3回以内	○ダコレート水和剤(1+M5)は果実赤点病にも登録がある。
	シンクイムシ類	エクシレルSE 2,500～5,000倍	28	収穫前日まで	3回以内	
6月下旬 ～7月上旬	灰星病 ホモブシス腐敗病	ベルコート水和剤 2,000倍	M7	収穫前日まで	3回以内	○モモノゴマダラノメイガの被害果は除去して土中に埋める。 ○防袋後すみやかに殺菌剤を散布する。
	シンクイムシ類	ディアナWDG 5,000倍	5	収穫前日まで	2回以内	
7月上旬 ～中旬	モモハモグリガ 黒星病 灰星病 ホモブシス腐敗病	サムコルフロアブル10 5,000倍 オンリーワンフロアブル 2,000倍	28 3	収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 3回以内	○クワシロカイガラムシは幼虫の孵化期で、モモハモグリガの活動も多い。 ○収穫中の品種にかからないようにする。
晩生種 防袋後	灰星病・黒星病 ホモブシス腐敗病	アクサーフロアブル 2,000倍	3 + 7	収穫前日まで	3回以内	
	シンクイムシ類	ロディー乳剤 1,000倍	3A	収穫前日まで	5回以内	
9月上旬～ 10 月下旬	せん孔細菌病	ICボルドー412 30～50倍	M1	――	――	○モモハモグリガ発生園では、スミチオン水和剤40(1B) 800～1,200倍(収穫3日前まで・6回以内)を散布する。 ○せん孔細菌病発生圃場では、必ず防除を行う。 ○バンド巻きを行う。 ○ミイラ果、袋は落葉後に処分する。

(注1) 表中の使用回数は、その薬剤の使用回数を記載しております。このほかにも、農業には有効成分ごとに総使用回数が定められています。そのため、薬剤名が異なっても有効成分が同じものや、混合剤の使用に際しては、ラベルなどに記載されている有効成分ごとの総使用回数にもとづき使用して下さい。
(注2) 袋かけ前までの散布の際には、展着剤を加用する。

病害虫の発生状況により必要な防除

病害虫	判断基準	防除時期および防除法
せん孔細菌病	前年度多発の場合 風当たりの強い園	防風ネットの設置。剪定時に病枝を剪除する。 開花期～5月上旬：せん孔細菌病は、風で揺られた傷から感染する。 袋掛け直前と風雨の後にはマイコシールド(41) 1,500～3,000倍(収穫21日前まで・5回以内)またはバリダシン液剤(U18) 500倍(収穫7日前まで・4回以内)を10日間隔で3回程度散布する。
黒星病	前年度発生園	5月下旬～6月中旬：オンリーワンフロアブル(3) 2,000倍(収穫前日まで・3回以内)、ネクスターフロアブル(7) 1,500～3,000倍(収穫前日まで・3回以内)またはファンタジスタ顆粒水和剤(11) 3,000倍(収穫前日まで・3回以内)を散布する。
灰星病	前年度発生園 (中年および晩生種)	6月中旬～7月上旬：オンリーワンフロアブル(3) 2,000倍(収穫前日まで・3回以内)、ネクスターフロアブル(7) 1,500～3,000倍(収穫前日まで・3回以内)またはファンタジスタ顆粒水和剤(11) 3,000倍(収穫前日まで・3回以内)を散布する。
ホモブシス腐敗病	前年多発の場合	6月中旬～防袋後：オンリーワンフロアブル(3) 2,000倍(収穫前日まで・3回以内)、またはファンタジスタ顆粒水和剤(11) 3,000倍(収穫前日まで・3回以内)を散布する。スクレアフロアブル(11) 2,000～3,000倍(収穫前日まで・3回以内)でもよい。
うどんこ病	前年多発園	サルバトールME(3) 3,000倍(収穫前日まで・3回以内)を散布する。
カイガラムシ類	多発の場合	アブロード水和剤(16) 1,000倍(収穫14日前まで・3回以内)を幼虫期に散布する。アブロードエースフロアブル(21A+16) 1,000倍(収穫14日前まで・1回)又は、モスピラン顆粒水溶剤(4A) 2,000倍(収穫前日まで・3回以内)でも可。
カメムシ類	多発の場合	アグロスリン水和剤(3A) 2,000倍(収穫前日まで・5回以内)、アルバリン顆粒水溶剤(4A) 2,000倍(収穫前日まで・3回以内)、アドマイヤー顆粒水和剤(4A) 10,000倍(収穫3日前まで・2回以内)のいずれかを散布する。黄色灯を点灯する。(6月～8月)
モモハモクリガ	多発の場合	サムコルフロアブルi0(28) 5,000倍(収穫前日まで・3回以内)を散布する。 エクシレルSE(28) 2,500～5,000倍(収穫前日まで・3回以内)でも可。
クビアカツヤカミキリ		モスピラン顆粒水溶剤(4A) 2,000倍(収穫前日まで・3回以内)を散布する。ハチハチフロアブル(21A,39) 1,000倍(成虫発生期、但し、収穫前日まで・2回以内)又は、アクタラ顆粒水溶剤(4A) 2,000倍(収穫前日まで・3回以内)でも可。

※アグロスリン水和剤(3A)、ロディー乳剤(3A)等 合成ピレスロイド剤の使用は年1回にする。
※この防除暦は2024年度時点での登録内容です。国の農薬登録制度が変わったため、登録内容が変更になる場合があります。
農薬使用時には最新の登録内容を必ずご確認ください。※



お問い合わせは
株式会社 藤万

ふ じ ま ん
藤 万

五條市野原西4丁目11－30
TEL : 0747－23－2400
FAX : 0747－22－2035
MAIL : inquiry@fujiman.co.jp
H P : https://fujiman.co.jp/



藤万公式サイト

2025年度

カキ防除暦（富有）



間伐・剪定を徹底し薬剤のかかりやすい園地にしましょう

基準防除（梅隣接園）（それ以外の隣接園では、各関係機関に問い合わせてください。）

※ 薬品名の後ろの()はRACコードです。

時期	病害虫	薬剤及び濃度	RAC	収穫前使用時期	使用回数	備考
12月～3月 (休眠期)	越冬病害虫	冬季防除（耕種の防除） ○粗皮削りは根幹害虫、フジコナカイガラムシ等重要害虫の越冬密度を下げる効果が高い。○病害対策として、落葉焼却（落葉病）、病枝せん除（炭疽病）を徹底する。 ○石灰硫黄合剤（M2）7倍（発芽前）を散布する。				
4月中旬～下旬	カイガラムシ類 アザミウマ類 ケムシ類	オリオン水和剤40 1,000倍	1A	収穫21日前まで	1回	○カイガラムシ類幼虫にはアブロード水和剤(16)(脱皮阻害剤)1,000倍(開花期まで但し、収穫45日前まで・2回以内)でもよい。但し、開花後は果実に薬害が出るので絶対に使用しない。 ○オーソサイド水和剤(M4)は小梅が混植されている園地では使用に注意する。 ○ハダニ類は発生を抑えるため、除草を励行する。ただし、下草で多発した場合の機械除草は、柿への移動を助長するので注意。
4月下旬～5月上旬	炭疽病	オーソサイド水和剤80 1,000倍	M4	収穫7日前	5回以内	
5月中下旬 (ミツバ)	落葉病 炭疽病 うどんこ病 灰色かび病	ベルケート水和剤 1,000～1,500倍	M7	収穫14日前まで	3回以内	○炭疽病前年発生園では必ず実施する。 ○殺虫剤は混用しない。
6月上旬～中旬	落葉病 うどんこ病	スコア顆粒水和剤 3,000倍	3	収穫前日まで	3回以内	○カメムシ類は発生予察情報に注意し、適用防除に努める。 ○炭疽病お困りの場合はスコア顆粒水和剤(3) 3,000倍(収穫前日まで・3回)を代用する。 ○カキノヘタムシガ多発園ではアルバリン顆粒水溶剤(4A) 2,000倍（収穫前日まで・3回以内）を使用する。 ○炭疽病の発病新梢は、必ず切除・処分しておく。炭疽病発生園では、下記を参考に追加防除を実施する。 ○6月中旬に降雨が多い場合は、病害対策としてナリアWDG(11+7) 2,000倍～3,000倍（収穫前日まで・2回以内）を散布する。 ○ストロビードライフフロアブル(11)の代用でフリントフロアブル25(11) 2,000～3,000倍(収穫前日・3回まで)でも可。 ○降雨が多くなると予想される場合は、耐雨性を高めるため展着剤のK. Kステッカー（2500～3,000倍）を 加用する。
	チャノキイロアザミウマ カイガラムシ類	コルト顆粒水和剤 2,000～3,000倍	9B	収穫前日まで	3回以内	
6月下旬 (幼果期)	落葉病 炭疽病 うどんこ病	ストロビードライフフロアブル 3,000倍	11	収穫14日前まで	3回以内	○炭疽病発生園では、ジマンダイセン水和剤(M3) 400～800倍（収穫45日前まで・2回以内）に変更する。 ○夏期の防除は薬害防止のため日中高温時を避け、朝夕の涼しい時間帯に散布する。 ○炭疽病の発病果・枝は秋季の伝染源となるので、9月までに出来る限り除去しておく。 ○カキノヘタムシガは、発生予察情報を基に適期防除に努める。 ○カキノヘタムシガ多発園では、サムコルフロアブル10(28) 5,000倍（収穫前日まで・3回以内）を散布する。 ○気温の低下とともに炭疽病の発病果が新たに発生するので、除去を徹底する。 ○炭疽病発生園では、下記を参考に追加防除を実施する。 ○カメムシ類発生時には下欄から殺虫剤を選択・変更する。 ○サムコルフロアブル(28) 5,000倍（収穫前日まで・3回以内）でも可。
	アザミウマ類 カイガラムシ類	モスビラン顆粒水溶剤 2,000～4,000倍	4A	収穫前日まで	3回以内	
8月上旬～中旬	炭疽病 うどんこ病	チオノックフロアブル 500倍	M3	収穫30日前まで	2回以内	○炭疽病発生園では、ジマンダイセン水和剤(M3) 400～800倍（収穫45日前まで・2回以内）に変更する。 ○夏期の防除は薬害防止のため日中高温時を避け、朝夕の涼しい時間帯に散布する。 ○炭疽病の発病果・枝は秋季の伝染源となるので、9月までに出来る限り除去しておく。 ○カキノヘタムシガは、発生予察情報を基に適期防除に努める。 ○カキノヘタムシガ多発園では、サムコルフロアブル10(28) 5,000倍（収穫前日まで・3回以内）を散布する。 ○気温の低下とともに炭疽病の発病果が新たに発生するので、除去を徹底する。 ○炭疽病発生園では、下記を参考に追加防除を実施する。 ○カメムシ類発生時には下欄から殺虫剤を選択・変更する。 ○サムコルフロアブル(28) 5,000倍（収穫前日まで・3回以内）でも可。
	カキノヘタムシガ	スミチオン水和剤40 800～1,200倍 または ダントツ水溶剤 2,000～4,000倍	1B 4A	収穫30日前まで 収穫7日前まで	3回以内 3回以内	
9月上旬	炭疽病 うどんこ病	ナティーボフロアブル 2,000倍	3+11	収穫前日まで	3回以内	○炭疽病発生園では、ジマンダイセン水和剤(M3) 400～800倍（収穫45日前まで・2回以内）に変更する。 ○夏期の防除は薬害防止のため日中高温時を避け、朝夕の涼しい時間帯に散布する。 ○炭疽病の発病果・枝は秋季の伝染源となるので、9月までに出来る限り除去しておく。 ○カキノヘタムシガは、発生予察情報を基に適期防除に努める。 ○カキノヘタムシガ多発園では、サムコルフロアブル10(28) 5,000倍（収穫前日まで・3回以内）を散布する。 ○気温の低下とともに炭疽病の発病果が新たに発生するので、除去を徹底する。 ○炭疽病発生園では、下記を参考に追加防除を実施する。 ○カメムシ類発生時には下欄から殺虫剤を選択・変更する。 ○サムコルフロアブル(28) 5,000倍（収穫前日まで・3回以内）でも可。
	イラガ類・ハマキムシ類 ハスモンヨトウ・ケムシ類	フェニックスフロアブル 4,000倍	28	収穫7日前まで	2回以内	

（注1） トクチオン水和剤(1B)、デランフロアブル(M9)は、梅隣接園では食品衛生法に基づく農薬残留基準の関係で、梅(果実)からこれらの農薬成分が検出されれば、出荷停止、栽培自粛など、産地として大きな打撃を受けることとなります。よろしくご理解をお願いします。
（注2） ジマンダイセン水和剤(M3)、有機銅剤は、梅(果実)に飛散すると果面の汚れの原因となります。クリーム、トラブルを回避するためにも、梅隣接園では使用しないようお願いします。

他作物が隣接しない、飛散の心配のない富有園の場合

時期	病害虫	薬剤及び濃度	RAC	収穫前使用時期	使用回数	備考
12月～3月 (休眠期)	越冬病害虫	冬季防除（耕種の防除） ○前年カイガラムシ類多発園ではマシン油乳剤()にトクチオン水和剤(1B) 800倍(収穫75日前まで・2回以内)を混用散布すると効果がある。 但し、年間防除の中で2回使用できない為、回数に注意すること。 ○粗皮削りは根幹害虫、フジコナカイガラムシ等重要害虫の越冬密度を下げる効果が高い。○病害対策として、落葉焼却（落葉病）、病枝せん除（炭疽病）を徹底する。 ○石灰硫黄合剤（M2）7倍（発芽前）を散布する。				
4月中旬～下旬	フジコナカイガラムシ類 カキクダアザミウマ	トクチオン水和剤 800倍	1B	収穫75日前まで	2回以内	○カイガラムシ類幼虫にはアブロード水和剤(16)(脱皮阻害剤)1,000倍(開花期まで但し、収穫45日前まで・2回以内)でもよい。但し、開花後は果実に薬害が出るので絶対に使用しない。 ○トクチオン水和剤(1B)は単用で使用する。 ○ハダニ類発生を抑えるため、除草を励行する。ただし、下草で多発した場合の機械除草は、柿への移動を助長するので注意。
4月下旬～5月上旬	炭疽病	ジマンダイセン水和剤 400～800倍	M3	収穫45日前まで	2回以内	
開花時期	カキクダアザミウマ	オルトラン水和剤 1,500倍	1B	収穫45日前まで	2回以内	○オルトラン水和剤(1B) 1,500倍(収穫45日前まで・2回以内)を散布して、ミツバチ放出まで20日以上期間を空ける事。
5月中下旬 (ミツバ導入直前)	落葉病 炭疽病 うどんこ病 灰色かび病	オーソサイド水和剤80 1,000倍 オンリーワンフロアブル 2,000倍 またはベルケート水和剤 1,000～1,500倍	M4 3 M7	収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫14日前まで	5回以内 3回以内 3回以内	○炭疽病前年発生園では必ず実施する。 ○ストロビードライフフロアブル(11)の代わりに同系統のフリントフロアブル25(11) 2,000～3,000倍(収穫前日・3回以内)でも可。 ○殺虫剤は混用しない。
	落葉病 炭疽病 カキノヘタムシガ、アザミウマ類 、イラガ類、カイガラムシ類	デランフロアブル 2,000倍 オリオン水和剤40 1,000倍	M9 1A	収穫90日前まで 収穫21日前まで	5回以内 1回	
6月上旬～中旬	カキノヘタムシガ、アザミウマ類 、イラガ類、カイガラムシ類	オリオン水和剤40 1,000倍	1A	収穫21日前まで	1回	○カイガラムシ類多発園ではトクチオン水和剤(1B) 800倍(収穫75日前まで・2回以内)を使用する。 ○6月中旬に降雨が多い場合は、病害対策としてナリアWDG(11+7) 2,000倍～3,000倍(収穫前日まで・2回以内)を散布する。 ○炭疽病発生園では、下記を参考に追加防除を実施する。 ○降雨が多くなると予想される場合は、耐雨性を高めるため展着剤のK. Kステッカー（2500～3,000倍）を 加用する。 ○カメムシ類は発生予察情報に注意し、適用防除に努める。
	落葉病 うどんこ病 コナカイガラムシ類 アザミウマ類	ストロビードライフフロアブル 3,000倍 または スコア顆粒水和剤 3,000倍 ダントツ水溶剤 2,000～4,000倍	11 3 4A	収穫14日前まで 収穫前日まで 収穫7日前まで	3回以内 3回以内 3回以内	
8月上旬～中旬	炭疽病 うどんこ病	チオノックフロアブル 500倍	M3	収穫30日前まで	2回以内	○炭疽病発生園では、ジマンダイセン水和剤(M3) 400～800倍（収穫45日前まで・2回以内）に変更する。 ○夏期の防除は薬害防止のため日中高温時を避け、朝夕の涼しい時間帯に散布する。 ○炭疽病の発病果・枝は秋季の伝染源となるので、9月までに出来る限り除去しておく。 ○カキノヘタムシガは、発生予察情報を基に適期防除に努める。 ○カキノヘタムシガ多発園では、サムコルフロアブル10(28) 5000倍（収穫前日まで・3回以内）を散布する。
	カキノヘタムシガ	スミチオン水和剤40 800～1,200倍	1B	収穫30日前まで	3回以内	
9月上旬	炭疽病 うどんこ病	スコア顆粒水和剤 3,000倍	3	収穫前日まで	3回以内	○気温の低下とともに炭疽病の発病果が新たに発生するので、除去を徹底する。 ○炭疽病発生園では、下記を参考に追加防除を実施する。 ○カメムシ類発生時には下欄から殺虫剤を選択・変更する。 ○サムコルフロアブル10(28) 5,000倍（収穫前日まで・3回以内）でも可。
	イラガ類・ハマキムシ類 ハスモンヨトウ・ケムシ類	フェニックスフロアブル 4,000倍	28	収穫7日前まで	2回以内	

（注）表中の使用回数は、その薬剤の使用回数を記載しています。このほかにも、農薬には有効成分ごとに総使用回数が定められています。そのため、薬剤名が異なっても有効成分が同じものや、適合剤などの使用に際しては、ラベルなどに記載されている有効成分ごとの総使用回数に基づき使用して下さい。

病害虫の発生状況により必要な防除

病害虫	判断基準	防除時期および防除法
炭疽病 (特に注意が必要)	前年発生園及び発病果・枝を確認した場合	7月中旬(梅隣接園では収穫後):ジマンダイセン水和剤(M3) 400～800倍(収穫45日前・2回以内)、ナティーボフロアブル(3+11) 2,000倍(収穫前日まで・3回以内)のいずれかを散布する。
		9月中旬～10月上旬: オンリーワンフロアブル(3) 2,000～3,000倍（収穫前日まで・3回以内）、ナリアWDG(11+7) 2,000～3,000倍（収穫前日まで・2回以内）、スコア顆粒水和剤(3) 3,000倍（収穫前日まで・3回以内）のいずれかを散布する。 早生品種との混植・隣接園では、登録内容（収穫前日数）に注意して使用する。
		前年多発園では、5月～梅雨明けまでに約10日間隔で薬剤散布し、徹底防除することが必要。
炭疽病		スクレアフロアブル(11) 2,000～3,000倍（収穫前日まで・3回以内）を散布する。 ミギワ20フロアブル(52) 2,000～4,000倍（収穫前日まで・3回以内）を散布する。
疑似炭疽病	定期防除で炭疽病が止まらない場合	ベンレート水和剤(1) 2,000倍（収穫前日まで・6回以内）を散布する。
落葉病	前年多発園および放任園が隣接する場合	7月上中旬:スコア顆粒水和剤(3) 3,000倍（収穫前日まで・3回以内）またはネクスターフロアブル(7) 1,500倍（収穫前日まで・3回以内）を散布する。
すす点病(ハイフン)	前年多発園	6～7月中旬:ベルケート水和剤(M7) 1,000～1,500倍（収穫14日前まで・3回以内）または オーソサイド水和剤80(M4) 1,000倍（収穫7日前まで・5回以内）を散布する。
樹幹害虫 (ヒメコスカシバ、 フタモンマダラメイガ)	発生が目立つ場合	4月下旬: フェニックスフロアブル(28) 200倍（開花期まで・1回以内）を樹幹部に散布する。 散布圧力を低くして枝に沿って少量散布する。(2～5L/樹)。 スカシバコン(-) (40～100本/10a・成虫発生初期から終期) は、2ha以上のまとまった面積に設置するとヒメコスカシバの密度低下に効果がある。
カメムシ類	飛来・加害を認めた場合	<防除薬剤>アドマイヤー顆粒水和剤(4A) 5,000～10,000倍（収穫7日前まで・3回以内）、アグロスリン水和剤(3A) 1,000～2,000倍（収穫前日まで・3回以内）、ダントツ水溶剤(4A) 2,000～4,000倍（収穫7日前まで・3回以内）、アルバリン顆粒水溶剤(4A) 2,000倍（収穫前日まで・3回以内）、梅隣接園では収穫後使用可: キラップフロアブル(2B) 2,000倍（収穫7日前まで・2回以内）
フジコナカイガラムシ	発生が目立つ場合	モベントフロアブル(23) 2,000倍（収穫7日前まで・3回以内）、バリード顆粒水和剤(4A) 2,000倍（収穫前日まで・3回以内）またはコルト顆粒水和剤(9B) 2,000～3,000倍（収穫前日まで・3回以内）を散布する。
ハダニ類	前年多発園および少雨高温年	5月下旬～6月上旬: ダントロンフロアブル(21A)1,000～2,000倍（収穫7日前まで・1回以内）、ダニコングフロアブル(25B) 2,000倍（収穫前日まで・1回以内）、マイトコーネフロアブル(20D)1,000～1,500倍（収穫7日前まで・1回以内）またはスターマイトフロアブル(25A)2,000倍（収穫前日まで・1回以内）を散布する。
カキサビダニ	前年多発園および少雨高温年	コテツフロアブル(13) 4,000倍（収穫14日前まで・2回以内）を散布する。ピラニカ水和剤(21A)は展葉～開花期には薬害の恐れがあるので使用しない。
アザミウマ類		ディアナWDG(5) 5,000倍（収穫前日まで・2回以内）を散布する。

※合成ピレスロイド剤の多用は、ハダニ類やカイガラムシ類の多発を招くので注意する。

※この防除暦は2024年度時点での登録内容です。国の農薬登録制度が変わったため、登録内容が変更になる場合があります。
農薬使用時には最新の登録内容を必ずご確認ください。※

農薬残留リスク低減のため農薬散布に伴う飛散には十分に注意しましょう

お問い合わせは

ふ じ ま ん

有限会社

藤 万

五條市野原西4丁目11－30
TEL：0747 - 23 - 2400
FAX：0747 - 22 - 2035
MAIL：inquiry@fujiman.co.jp
H P：https://fujiman.co.jp/



藤万公式サイト